

経済三団体 新年祝賀会



経済三団体(経済同友会、日本経済団体連合会、日本・東京商工会議所)は1月5日、2022年新年祝賀会を開催し、各団体に所属する企業経営者200人超が参加した。2年ぶりとなる祝賀会は、出席者を大幅に制限、飲食なしの着席形式とし、出席できない会員に向けてオンライン配信を実施するなど、新型コロナウイルス感染防止策を講じた開催となった。来賓として出席した岸田文雄首相は、「コロナ克服にめどを付け、経済のV字回復を成し遂げていく」と力強く語った。幹事団体として挨拶した櫻田謙悟代表幹事は、「『ひとり1イノベーション宣言』に挑戦し、令和4年を『イノベーション元年』に」と呼び掛けた。

岸田文雄内閣総理大臣挨拶(要旨)

ピンチをチャンスと捉えて、大胆に挑戦を行うことで新しい資本主義を実現していきたい

成長の果実をしっかりと分配することで経済の好循環を次の成長へ

本年を大胆に挑戦する年にしたい。新たな時代を切り拓く1年にしたいが、慎重であるべきところは、慎重に物事を進めていかなければならない。

特に慎重でなければならないのは、新型コロナ対応だ。最悪を想定しながら対応を進め、新型コロナを克服したい。コロナ克服のめどを付けた上で、経済のV字回復を成し遂げていく。さらに、新型コロナというピンチをチャンスと捉えて、人への投資、デジタル、炭素中立といった切り口から、経済社会の変革に向けて、大胆に挑戦を行うことで新しい資本主義を実現していきたい。

中間層への分配にも正面から向き合

う。成長の果実をしっかりと分配することで経済の好循環が生まれ、次の成長につながる。企業の賃上げは経済成長の観点からも極めて重要だ。

デフレによる縮小循環から、成長と分配の好循環へと社会全体の雰囲気をも明確に変えていくためには、コロナ禍からのリバウンドと、新時代への挑戦が重なるこのタイミングを官民でしっかり捉え、局面転換していかなければならない。日本経済の局面転換に弾みをつけるためにも、経済界の皆さまには賃上げに攻めの姿勢で協力いただきたい。

新しい資本主義は歴史的な挑戦 主体的な参加を

政府は賃上げ税制、看護・介護・保



岸田 文雄 内閣総理大臣

育・幼児教育などの公的価格の引き上げ、公的調達の活用など、できることは何でもやっていく。さらに、次世代を担う子育て・若者世代の世帯に焦点を絞って、所得倍増を可能とする制度改革にも取り組んでいく。

世界各国が新しい経済モデルを模索する中、新しい資本主義は、わが国の歴史的な挑戦である。政府、民間企業、国民それぞれが、新しい時代を切り拓く努力を協調して進めていくことでのみ活路が開ける。主体的にこの挑戦に参加いただきたい。

新時代リアリズム外交の推進

最後に外交・安全保障については、厳しさと複雑さを増す国際情勢の中で、巧みなかじ取りと安定政権の確立が、以前にも増して求められている。未来への理想の旗を掲げ、現実をしっかりと見据えながら、普遍的価値の重視、地球規模課題の解決に向けた取り組み、国民の命と暮らしを断固として守り抜く取り組みを3本柱とした新時代リアリズム外交を推し進めていきたい。



幹事団体団体長挨拶(要旨)

新しい日常をチャンスと捉え、 企業のイノベーションで社会課題の解決を

「ウィズコロナ」が新しい日常になる

数多くある感染症ウイルスのうち、人類がこれまで完全に撲滅させた感染症は天然痘のみだそうだが、今後も新しい変異種が発生し続けると考えられる。つまり「ウィズコロナ」が新しい日常となっていくのではないかと。この新しい日常の到来をチャンスと捉え、「新しい成長」と「新しい分配」の循環によって皆が豊かになる日本を起動するための1年にしていきたい。

平成の30年間、日本は十分に成長しておらず、残念ながら国際比較では相対的に貧しくなっている。30年は大変に長い期間で、現在の働き手の多くは「成長」を体感したことがない。元気な日本を取り戻すためには、成長と豊かさの実感、将来への希望が絶対に不可欠である。

「ひとり1イノベーション宣言」 への挑戦

戦後から高度成長期にかけて、イノベーションは日本の「お家芸」だった。例えば、ウォークマン、カップラーメン

ン、カンバン方式など、日本から世界に広がったものがたくさんある。この勢い、イノベーションを取り戻すことが、日本が目指すたった一つの成長への道だ。しかし、イノベーションには一律のノウハウや成功の方程式はない。その時々、経営者が、必死に考え抜くことで生み出してきた。今年の幕開けにあたり、私たち経営者が、自分たちがどのようなイノベーションを起こすか、「ひとり1イノベーション宣言」に挑戦することを提案する。

湧き起こる「イノベーション元年」に

平成30年の間に、社会に積み重なった「既得権」がイノベーションを妨げているのではないかと。私たちの身の回りにも、たくさんの既得権、それを生み出している固定観念や守りの思想が多く存在する。「これまでの常識」で、せっかくのイノベーションの芽や才能、将来ある若い人たちの創造性をつぶしていないか、よく考える必要がある。企業も政府も個人も、イノベーションと成長実現のため、いわば「最大多数の最大幸福」に向けて既得権を手放す、



そうした全てのステークホルダー、つまり生活者全体によるイノベーションが必要である。

テレワークやリモート授業、またメジャーリーグでMVPに選ばれた大谷翔平選手の二刀流も、できないという思い込みややりたくないという事情を乗り越えて実現した。私たちそれぞれがいったん頭をリセットし、目指したい未来を描くことから始める必要があるのではないかと。

イノベーションが社会課題を解決し、成長を生む。成長や進歩が明日への希望を生み、その希望が成長を加速させる。成長が新しい改革と分配へつながり、最大多数の最大幸福を生む。これが「新しい資本主義」に基づく目指すべき日本の姿ではないかと。令和4年を日本の生活者全員による、日本の津々浦々で湧き起こる「イノベーション元年」にしていきたい。

合同記者会見

経済三団体 団体長合同記者会見(要旨)

「リアリズム」が一つのキーワードである

櫻田 謙悟 経済同友会 代表幹事 発言要旨

経済社会、景気の展望について

VUCAの時代と言われる中で、今年をどういう年にしたいかという心意気や志が重要だ。足元ではオミクロン株の感染拡大、サプライチェーンの混乱、資源価格の高止まり、テーバリングなどリスクが存在するが、危機を脱出・卒業して、徐々に回復に向かっていく年であってほしい。世界はそうした方向に向かっており、日本も若干遅れてはいるが、世界についていく地力は十分ある。経済界としてもイノベーションを引き起こす努力をしていきたい。

国際情勢の現状認識と見通し

今年は米国の中間選挙、中国の共産党大会があり、フランスと韓国では大統領選挙がある。各国とも内向き、自国優先のスタンスが中心になるのではないかと。日本も参議院議員選挙を控えているが、安定した統治能力を発揮できる可能性が高いことの意義は大きい。各国が内向きになる中で、日本がこの立場を利用して、どのようにリーダーシップを発揮していくかが重要である。

岸田総理がご挨拶で、リアリズム外

交という言葉が使われたが、共感の持てる言葉である。現実的外交、現実的カーボンニュートラルなど、リアリズムという言葉が一つのキーワードである。中国との向き合い方を考えたときに、交渉すべきことと交渉してはいけない分野がある。合理性で解決できる経済と価値観の問題である人権や民主主義のあり方といった二つの分野をしっかりと分けることが、日本の立ち位置として非常に重要である。

脱炭素への取り組み

CO₂の排出量を2013年度対比46%削減するという目標を2030年に達成することは簡単ではない。理由は二つある。まず、原子力の問題が解決できていないことだ。この問題に真正面から、リアリズムを持って、現実を直視しながら取り組んでいかなければならない。二つ目は、再生可能エネルギーの開発・投資を楽観視できないことである。日本には技術はあるが、国民の総意や意思決定の不足がネックになっている。このまま状況が推移した場合に2030年がどうなるかというシナリオをいくつか書けるはずである。再生可能エネ

ギーをどうしていくのか、そのために誰がどのような決断をすればいいのかを含めた決断が繰り返されない限り、2030年目標は達成できない。

イノベーションと成長

平成時代のイノベーションが国全体を引き上げるムーブメントにつながらなかった理由を考えると、社会、生活者全体の受け入れ態度が足りていなかったように思う。また、国際競争に対するしたたかさ、リアリズムが欠けていた。イノベーションは科学技術だけではない。ビジネスモデルのイノベーション、あるいは祖業を捨てて新しい事業に出ていくようなイノベーションもあるだろう。そういったものを、当該企業の経営者や社員も含めて、社会が受け入れていくことが重要である。変わりたくない、変わらないというところにどう切り込むかという覚悟が、生活者全般に求められる。

人口減少への対応について

重要なことは、日本に籍を置く企業が日本以外の国籍を有する人、タレントを集められるような魅力ある企業になること、そのような人事制度や処遇体系を持っていること、そうした採用慣行を続けることである。ジェンダーのみならず、実際にはナショナル리티のダイバーシティも必要だし、LGBTQなどの取り組みはまだである。日本の人口が減っていくことは事実であり、その現実を直視した上でチャンスに変えていくことに、すぐに取り掛からなければならない。

